

授業改善に関する実践的研究 6. 看護教員のための討議法の授業

米谷 淳 (神戸大学大学教育研究センター助教授)

授業改善に関する実践的研究

6. 看護教員のための討議法の授業

米谷 淳（神戸大学大学教育研究センター助教授）

授業改善には決して今行っている授業をよりよくすることだけが含まれるのではない。新たな授業を構想し、企画し、実践する「授業づくり」も当然含まれる。そもそも授業にはできあがったものなどなく、授業改善とは理想とする授業、独創的な授業をつくり上げ、つくり出し、つくり込む営みに他ならない。なぜならば、授業は教える側も教わる側も、ともに学びと気づきを得、さらに成長していくために不可欠な切磋琢磨、相互啓発の場であり、きっかけであるからである。本稿では平成13年度に私が初めて担当することになった新任看護教員への「討議方法」の授業を取り上げ、5回の授業のそれぞれをふりかえり、授業づくりのプロセスとそこで実際に直面した様々な問題について考察する。

1. 平成13年度大阪府看護教員養成講習会

私は昨年、大阪府が毎年主催している看護教員養成講習会（補遺1参照）で「討議方法」の授業を受け持つことになった。この講習会は文字通り看護学校の教員を養成するための講習会であり、一般の大学で行われている「教職科目」や「教育実習」に相当するものと考えてよいだろう。ただし、大学の場合は教員免許取得のために学生が受講する場合が少なくないのに対し、看護教員養成講習会は経験5年以上の看護婦¹⁾で看護学校等に1年以上勤務している現職者が対象であり、講習生は講習修了して厚生労働省認定の修了証を受け取ったら直ちに職場に復帰し、さまざまな授業や看護実習を担当する。

平成13年度の受講者は70名で、大阪府だけでなく京都府、兵庫県、奈良県、滋賀県の看護学校の新任教員であった。カリキュラムは、基礎分野4科目、教育分野5科目、専門基礎分野17科目の計26科目からなり、講義だけでなく、現場での実習や情報処理演習も含まれていた。期間は平成13年4月10日から12月21日までの8カ月で、この間受講生はほとんど毎日、大阪城のそばにある大阪府看護会館「ナーシングアート大阪」に通い、午前3時間、午後3時間授業を受けた。

「討議方法」は平成13年度大阪府看護教員養成講習会の「その他」の科目として平成13年度に私が担当し、平成13年6月21日～7月19日の5日間、毎週1回3時間、計15時間授業した。

2. 「討議方法」の設計と準備

講習会の目的は看護教員養成にある。そして、対象者は現場経験のある看護婦である。私は兵庫県内の様々な病院で10年来携わってきた看護婦リーダー研修²⁾と数年間の看護学校での授業³⁾の経験をもとに、私なりの看護婦や看護教育への願いや思いをこめて、次のような方針で「討議方法」を設計した。

1. この授業では集団討議だけでなく様々な形態のグループセッションを取り上げる。ただし、授業者が実際に研修や授業で使用して、効果を確認したものから選ぶ。
2. そして、それらを講習生が各自の現場で使いこなせるように、それぞれの長所・短所、使用上の注意点などを理解させながら、実習を通して体験的に学ばせる。

3. しかし、実習ばかりをするのではなく、グループセッションの意義を主体的に考えさせるよう心がける。これにより、看護教員として、自分で考え、チームワークを尊重しつつも主体的に行動できる看護婦を育てるために、グループワークを看護教育に取り入れることが大切であることを理解させる。
4. 現在の教育界の動向について話し、伝統的な学習観や教え込み中心、知識伝達型の授業観を改め、社会構成主義的な学習観や学生主体の授業観に立って看護教育を進めていけるよう働きかける。こうしたことは、自分で考え判断し、責任ある行動を合理的な根拠（理論とデータ）に基づいてできる（実行でき説明できる）看護婦を育てていくために不可欠である。
5. 受講生が講習終了後にこの授業での学びを踏まえた授業実践ができるように、グループセッションを通して看護学生に看護コミュニケーションを学ばせる授業が設計できるようにする。

こうした点を踏まえながらシラバス（補遺2）を作成した。授業計画にあたっては、1回3時間の授業に実習（グループセッション）と講義（解説、語りかけ）をバランスよく配分し、なおかつ、毎回の授業終了時10分～15分を感想文⁴⁾の作成にあてることにした。また、感想文の中から質問事項や重要と思われるコメントを選び出し、B4版2・3枚のシート⁵⁾にまとめて次の授業で学生に配布し、それをういて「前回の復習と補足」を行った。

今回設計した授業は、大学生を対象とした通常の講義よりは実習が多いが、看護婦を対象とした通常のリーダー研修と比べると講義の比重がかなり大きい。これは対象が次代の看護者を育てる看護教員であり、それぞれの教育実践のコアとなる新しい学習観や授業観の構築にこの授業が少しでも資することができればと考えたためであり、講義内容も、グループセッションと関連の深い集団力学の理論だけでなく、授業論や学習論にも触れるようにした。しかしながら、私がモットーとしている「学生との相互作用を大切にする授業」「状況により自在に内容や方法を変える柔軟な授業」を実現するための手だてをできるだけあらわにしながらか授業を進め、集団の雰囲気づくりを心がけ、目的意識を明確にしながらか、計画的・合理的・効果的に授業をリードしていける看護教員の育成をめざすことにした。

6月から始めるこの授業の予行演習をかねて、非常勤で担当している看護学校の4月からの授業で、「絵あわせ」⁶⁾を除く「討議方法」で用いるほとんどすべてのグループセッションを行い、「慣らし」や時間研究（個々の作業に要する時間を測定し、効率よく作業を進めるための手順を検討すること）をすませておいた。この授業に取り入れた「相互開示」での“Who are you ?/ Who was he or she?”の演習（2人がペアになり、お互いに相手のことを10分ひたすら聞き続ける演習と、相手の人物像について第三者に3分で説明する演習）は、前年に神戸大学で実施した特別授業「自己と他者」で京都大学の神藤貴昭助手が行ったものを私が参観し、さらに、看護学校の授業で追試し発展させたものであり、その後、いくつかの看護婦研修や保健婦学校の授業で使用して成果を上げている。

毎回の授業のための準備に2～3日かけた。初回は、配付資料の作成、パワーポイントによるプレゼンテーションの準備を前日までに済ませ、当日はノートにタイムテーブルや授業のポイントや注意点などをメモして授業に臨んだ。2回目以降は、これらの作業に、前回の授業感想文の読み込み、ワープロ入力（配布資料作成）が加わった。なお、毎回、授業中に進行や受講生への伝達事項や約束事などをメモし、授業直後にその日の反省点やよかった点、次回にまわした事項などをメモするようにした。

3. 「討議方法」の授業記録－骨子と討議－

ここでは5回の授業のそれぞれについて、まず骨子を示し、次に授業の流れに沿って、いくつかの点について受講生の反応や感想をもとにふりかえり、考察する。

第1回 6月21日 小集団のグループダイナミックス

- ・本日の予定
- ・「討議方法」について
- ・「討議方法」のねらい
- ・授業計画
- ・第1回の内容：小集団によるグループセッション（GS）を授業に用いることの意義と形態
今、なぜGSか？
GSアラカルト（GSの代表的技法の説明）
実習 GSを体験する
「かおをみよ」¹⁾
「自己評価・他者評価」

第1回は授業全体のねらいや進め方について説明した後に、いくつかの代表的なグループセッションを受講者に体験させ、グループセッションの楽しさ・おもしろさを知ってもらうことにした。私は看護教員を対象とした講演²⁾は昨年すでに体験してはいたが、看護教員養成講習会も「討議方法」の授業も初めてであり、まずは「肩慣らし」「顔見せ」のつもりで自己紹介や私の職場や大学の教育改革の現状などについて話しながら、受講生の反応を確かめ、彼女らの興味・関心や理解度を探った。「脱線」や「余談」を意識的に多くし、「語り」の部分をしていねいにしたため、予定していたグループセッションの半分しかできず、第2回以降にグループセッション体験の多くを残すことになった。こうしたことは想定していたことであったが、やり始めてみると、前もってどうすべきかよく考えておらず、戸惑ってしまう事柄にいくつも出くわした。

第一に、授業開始の合図についてである。授業を看護学校でやっているように当番の学生の号令で出席者全員で「起立、礼、着席」をして開始するのか、大学でやっているように授業者のみが「始めます」と言って一礼した後淡々と始めるか、それとも、看護婦や社会人を対象にした「研修」や「講演」でやっているように、少々オーバーな程にこやかな笑顔をつくって「みなさん、おはようございます（こんにちは。）」と切り出して雰囲気づくりを始めていくか。こうしたことをあまりよく考えていなかった。講習会の趣旨や受講者については事前に資料を読んで知っていた。また、受講者が4月から2カ月間ほとんど毎日授業を受けていることがわかっていたし、受講者が看護学校の教員であることもあり、看護学生と同じように誰かに号令をかけてもらい「起立、礼、着席」で授業を開始することにし、「私の授業では、毎回の最初は、号令をかけて礼をしてから始めましょう。これは気持ちを切り替えるためのものです」と告げた。これについて、授業感想文に「先生は号令をかけさせなければ、授業が始められないのですか。号令は何のためにするのですか」と問いただす者が現れた。もしかしたら、他の授業では大学の通常の授業のように「始めます」と授業者が一礼して淡々と授業を開始していたのかもしれない。これを聞いて確かめもせず、また、受講者に諮らずに、一方的にやり方を決めてしまったことで、一部の受講者には「自分たちを看護学生のごとく扱おうとする高圧的な授業者」と映ったのかもしれない。

第二に、受講者に対する接し方についても戸惑った。受講生は授業者から見れば「学生」であるが、新任とは言え、すでに看護学校に1年以上勤務している現職の教員である。まして、看護業務経験を5年以上しているので、年齢から言ってもすでに「大学生」ではなく「社会人」である。私は「私の授業は看護学校で行っている通常のスタイルでやってみることにしますので、みなさんは看護学生になったような気分で受講してみてください」と話し、第1回はそうしたスタイルを通した。看護学校での初回の授業できるように、話し方をできるだけ丁寧にししながら、ややくだけた話題を入れたり、やや多めに「わかりますか」「このくらいのスピードでいいですか」と聞くことにした。これについて、複数の受講者が「いちいち「わかる?」「知ってる?」「これ習いました?」

と聞かれるのはあまりよい気分がしない」といった感想を書いた。これも現職の看護教員である受講者を学生扱いしたことによる反発の現われだろう。私も受講者も互いに一教員であり、もっと受講者を一個の教員として扱うべく配慮すべきであったと思う。

第三に、話し方や授業の進め方について、授業後に受講者の感想を読んだ後で戸惑いが生じた。わかりやすさを心がけ、ポイントをゆっくり話すとともに、授業中に何度も繰り返し述べた。これに対しては「丁寧でわかりやすかった」「テンポとスピードを大切に、ノリのよい授業」というポジティブな反応と、「くどい」「しつこい」「早すぎる」「もっと時間がほしい」というネガティブな反応に分かれた。確かに、第1回の予定としてできるだけ多くのグループセッションを体験させたいと考えていたが、導入と説明に時間をとられ、さらにそれぞれのグループセッションの切り替えに手間取り、思ったほどグループセッションができなかった。これについて、「ゆっくり考える時間を下さい」「休む間もなく次々とセッションを進めるのでついていけない」と書く受講生がいる一方で、「予定通りに授業を進めてほしかった」「もっと多くのグループセッションをしてみたかった」と書く受講生も数名いた。

このように受講者の反応は多様であるが、私の解釈では学生としてではなく一個の教員として扱われたいと思っている受講生が少なくなく、看護学校で通常しているようなスタイルで授業をすると反応はあまりよくないこと、また、受動的な受講スタイルをとりたがる受講者が少なくなく、授業者の側に立って考えることなく、一方的な要求や無理難題を感想に書いてくる受講者も複数いることがわかった。授業の進め方や話し方などについての受講者の反応が分かれるのは多様な受講者がいる以上やむをえないことであるが、乖離があまり大きくなるようにすべきである。そのためには、授業者と受講者がともにお互いを知り、理解し、適切な「間合い」や姿勢で授業ができるようになっていかなければならない。このために流す汗を惜しまず、勇気と忍耐をもって次からの授業に臨んでいこうと心に決めた。

第2回 6月28日 GSアラカルト

ー前半

- ・本日の予定
- ・全体計画の修正
- ・前回の復習・補足
- ・教師の成長モデル
- ・大学FD、learning、Group Dynamics

ー後半

- ・様々なGSを体験する
- 相互開示
- バスセッション
- 絵あわせ

第1回の授業進行や受講者の反応と授業感想文、そして、私自身の反省をもとに、2回目以降の授業全体を変更することにした。すなわち、グループセッションを体験させ、各自の授業に取り入れる方法や技術を学ばせることよりも、グループセッションについての受講者の態度、さらには、学習や授業についての受講者の態度を見直し改めさせることに力を入れるべきと考え、そうしたことを強調した授業計画に直した。テクニックだけを覚えても、態度が変わらなければ、この講習会で身につけた方法は現場で使われることはない。むしろ、知識伝達型で権威主義的・管理主義的な授業スタイルの問題性に気づかせ、受講者自身がそれを改め、授業改善の基礎基

本である新しい学習観や授業観をもてるように働きかけることに力を注ぐべきである。こうした考えに立ち、また、第1回でやり残したグループセッションの紹介を時間をかけて行うことにして、次のように全体計画を修正した。GSはグループセッションの略である。

第1回 今なぜGSか

第2回 GSアラカルト

第3回 GS活用事例

第4回 GS授業設計

第5回 GS授業模擬

むろん、これもあくまで授業進行の目安であり、毎回、テーマを決めていくつかのグループセッションの実習を行いながら、繰り返し新しい学習観や授業観について説明し、最後にそれを総括することにした。

第2回は、前半（1時半～3時）は、まず第1回の授業感想文を選んでワープロ打ちしたシートをもとに「前回の復習・補足」をした後、「大学FDと教師の成長」というテーマで講義をした。後半（3時15分～4時15分）は、「GSアラカルト」と題して「相互開示」「バズセッション」を行って集団力学、とくにリーダーの役割について解説したが、時間はこれだけで一杯だった。当初は「ディベートを見る（VTR視聴）」や「絵あわせ」も予定していたが、授業の進み具合を考えて次回以降に行うことにした。なお、第2回からは受講生を7～8人規模の班に分け、班ごとに机を合わせてグループセッションができる状態にした。

この回についての受講者の質問やコメントは「絵あわせ」に集中した。「絵あわせ」は、リーダー役とメンバー役を決めて行うグループセッションであり、課題は4人のメンバーが協力して1つの絵を完成させるというものである。この共同作業を通して、リーダーとメンバーがそれぞれの違う役割をもっていることに気づかせることがねらいである。「絵あわせ」の作業では、それぞれのメンバーは1枚の絵の別な部分（4分の1）を見て覚えることになっており、各メンバーは自分の役割（見てきた絵をきちんと再生し、次に全体の絵の完成に協力する）をきちんと果たすことが要求される。一方、リーダーは自分で絵をみることができず、メンバーに指示を出してそれぞれの部分の下絵書きの作業を促すとともに、4つの部分の絵をもとに1つの全体図を頭の中に作り上げ、それをもとに完成図の大枠を示して、作品完成の作業の中心となって働くことが要求される。しかし、「絵あわせ」をグループセッションに用いる場合、通常、リーダーとメンバーの役割については「それぞれが思い思いにやってみましょう、そして、作業終了後にどういう役割で動けばよかったかをグループ全体で話し合ひましょう」と指示されるだけであり、具体的な説明やヒントは与えられない。このセッションのポイントは、参加者に自分で考えようとさせること、さらに、グループ全員でいろいろ考えることであり、インストラクターが前もって説明してしまうと単なる「お絵かき」になってしまう。このセッションでは、各グループに作業終了後に元の絵のコピーを渡して、それを参考にしながら、グループで作品の出来ばえやグループ作業の進み具合、グループの雰囲気、メンバーとリーダーの役割などについて話し合わせ、最後に、リーダーに全体の前で作品を見せながら総括させる。最後に、インストラクターが簡単にセッションの解説と講評を行ってセッションを終了する。こうした流れを体験させることにしたが、時間がなくなったので「絵あわせ」の解説は次回にまわした。

そのため、「絵あわせは何のためにしたのか」「リーダーやメンバーの役割は何か」といった疑問や質問が数多く寄せられることになったのだろう。「絵あわせ」を始めるにあたって、「このセッションはグループ作業を通して、リーダーとメンバーの役割について考えていただくことがねらいです」と説明したにもかかわらず、「絵あわせの目的をはじめに教えてほしい」と書く者がいた。これは単に授業中の説明不足によるものではなく、むしろ受講者がつくりあげてきた授業に対する受動的な構えによるものと考えられる。とはいえ、このまま放置するわけにいけないので、次の回に、上述した「絵あわせ」のねらいや課題について丁寧に解説した後で、もう一度別な原画を用いて「絵あわせ」をやってもらうことにした。

第3回 7月 5日 GS活用事例

- ・前回の補足・復習・展開
前回の感想へのレスポンス
- ・絵あわせ（2回目）
- ・事例検討
教科書p.121の女子大生の事例

第3回は第2回のフォローに前半を費やした。解説後2回目の「絵あわせ」を行った。次に、「ディベートを見る」と題して1998年に北海道大学のFD研修においてなされたディベート風景（VTR）を見せる予定をしていたが、教室に設置してあったケーブルの故障によりできなくなった。そこで、教科書から事例をとってグループで事例検討をすることにした。また、次回にディベートを予定していたので、授業の終わりに「ディベートをするのにどんなテーマがよいか」を感想文と合わせて書いて提出してもらった。事例検討では、交通事故で右足切断を余儀なくされふさぎこんでいる女子大生にどうアプローチしてよいかわからなくなった看護学生の事例を取り上げ、そうした看護学生に対して看護教員がどのように接すればよいかを考えさせた。

また、第2回の授業感想文の中で授業中の私の言葉遣いや受講者への態度に対する不満や注意が書かれていたため、次のことを「本日の心得」として授業メモに書いて反省し、第3回から心がけた。

1. ていねいな言葉遣い、参加者へのflatで真摯な対応（態度）をとること。決して見下したり、決め付けたりせずに、「対決モード」や「敵意」を示さないように。
2. 落ち着いて、ゆっくり、ゆったり。やわらかで、しなやかで、しっかり、きっぱりした態度を示す。向学心、好学の姿勢や雰囲気づくりに努めよう。相手も教師であることを忘れずに、期待と思いやりをもって授業に臨むこと。
3. 暑いのでメリハリをつけ、「流し（リラックス）」モードと「本気（集中）」モードをきりわけるべし。多くを望まぬこと。地道に、確実に、そして、和やかに。

こうした反省と心がけに対して、授業感想文で「先週とは違った柔らかい雰囲気での授業だったと思います。苦勞と工夫が感じられました。」と評価する者がいた一方、「先週は先生がすごく不機嫌で攻撃的にみえ、今日はとても気をつかわれて、そのことばかりに気持ちがいっておられ、講義の内容がなかったように思います。先生の変化する態度に動揺してしまい、落ち着いて講義を受けることができません。」と批判的な者や、「今日は先生は元気がなかったように思います。みんなの感想がつかいいますか？」や「先生は今日の講義ではとくに余計な気をお使いになられていたように思います。先生は米谷先生らしくして下さいね。」と心配や同情をする者まで現れた。受講者の反応を受け止め、ややオーバーにそれに答えて授業を変化させていくことで、「状況に合わせて柔軟に対処する」状況対応的リーダーとしての授業者の姿を示そうとしたことは、受講者にさまざまなスペクトルをもって受け止められたようである。

ただし、「絵あわせ」の解説をした後、2回目を行ったことは全般的に支持されたようである。ほとんどのグループが短時間でほぼ完璧な原画を完成できたし、「絵あわせ」の目的もよく理解されていた。

第4回 7月12日 GS授業設計

前半

- ・前回の補足と復習
- ・ディベートを見る（VTR「北大FD'98」）

後半

- ・カリキュラム設計について（講義とグループワーク）
- ・話し合い ディベートについて

第4回では前回できなかったディベートのVTRを見せた後、資料をもとにディベートの目的と進め方、注意事項について説明した。後半では、シラバスのモデルを示しながらカリキュラム設計について解説し、グループセッションを各自の授業に生かすプランを班ごとに作成させることにした。もし時間があれば、一度ディベートを試してみるつもりでいたが、受講生と話し合い、授業者の判断でとりやめた。

ディベートのテーマについては前回、受講者に希望を書いてもらい、それを集計したものを資料として配布し、どのテーマでディベートをするかを班ごとに決めさせることにした。また、ディベートをやるかどうか、やるとしたらどのような形式とするかについても班ごとに話し合わせて、その結果を報告させた。この作業自体が集団討議の演習であることは言うまでもないが、その結果を授業に反映させることは民主的な授業スタイルを実践するためにも必要であった。しかし、そのことがかえって混乱を招くことになった。事の顛末はこうである。話し合いの結果を各班のリーダーに求め、それをホワイトボードに集計したところ、班対抗のディベートをするという意見が大半であった。しかし、ある班が「まだディベートの目的や効果についてよくわからないのに、やっても意味がない」という意見を強く主張した。確かに受講者の大半はディベートをすぐにも始めようという気持ちになっていることがわかったが、私は結局この少数意見を採用し、ディベートを見送り、かわりに班ごとにグループセッションを各自の授業にどのようにとりいれるかを話し合わせた。

これに対し、授業感想文に「何故多数の意見を尊重しないのか」「ディベートをやめた理由が納得できない」という不満を書いた者が多数出た。さらに、私がシラバス通り、あるいは、その日の最初に示した予定通りに授業を進めないことを批判する者もかなり現れた。しかし、今考えても、一部の者とは言え、意義ややり方に疑問を持たせたまま実習をすることは問題が大きく、強行することは延期（中止）することより有害であったに違いない。もう1回授業があることもあり、改めて第5回で「仕切りなおし」することは賢明であったと思う。

第5回 7月19日 GS授業模擬

- ・前回の補足と復習
- ・新しい学習観
- ・新しい授業観
- ・カリキュラム設計
- ・第5回の内容 GS授業模擬
- GSの総括
- 授業モデルの紹介
- グループ単位の作業
- ディベート演習
- 授業全体のまとめ

5回目の授業は「討議方法」の最終回であり、やり残しを仕上げ、全体の総括を行わなければならない。第4回でディベートを中止し、多くの受講者から批判を浴びた。また、私としても、この授業でどうしても受講生にディベートを体験させたかった。しかしながら、まとめとして「新しい学習観」と「新しい授業観」についても触れておきたいと思った。そこで、第5回の前半でそれらについて解説し、新しい学習観と授業観に立つカリキュラム設計におけるグループセッションの意義を改めて説くことにした。そして、後半では第4回まで

で扱ったグループセッションを総括し、その長所・短所や授業での使用上の注意点を確認し、最後にディベート演習を行って授業を終えることにした。第5回のテーマは確かに「GS授業模擬」であった。そして第4回では授業設計について解説しただけであり、各自の授業設計をさせるところまで至らなかった。しかし、これについては翌日から始まる実習でやっていただくことにして、「討議方法」では「様々なグループセッションを体験させてそれらを各自の授業で使えるようにさせると同時に、それらを各自の授業にとり入れるための態度をつくる」という目標の達成に専心することにした。

結局、第5回はそれまでの回と異なり、私が予定通り計画的に授業を進めた。そのため、話したいこと、やらせたいことのすべてができた。これについては満足できたが、もしかしたら第5回は従来通りの授業スタイル、つまり、授業者主導のノンインタラクティブ（非相互的）な授業をやり、受講生がそれに何も言わずに乗っただけかもしれないと思っている。スムーズに授業が進むことは気持ちがよく、授業者としての責任を果たせたかのような気分になる。しかしながら、スムーズな授業とは受講者が全面的に授業者の意図やメッセージを受容し、指示や期待の通りに動いた（反応した）だけかもしれない。それでは受講者の主体的・批判的な思考を促し、のぼす構成主義的な授業とはならない。受講者に考えさせ、主体的に学ばせようとするならば、授業中に授業者と受講者が何度も対立し、衝突し、相互の意見を戦わせる場面が何度も出てくるのは当然であろう。こうした授業は授業者と受講者のどちらにとっても葛藤が多い「辛く苦しい」ものとなるかもしれない。そうなれば、授業に対する受講者の評価が悪くなるだろう。居心地がよく、軽くて楽で「口当たりのよい」「何も考えなくても済む」ような授業は学生評価が高くなり、評判や人気上がるだろう。これに対して学生の受動的態度を是正し、主体的・批判的に考えさせようとする授業は学生評価が低くなり、人気のない授業となるかもしれない。しかし、だからといって後者を排除し、前者だけにしてしまうことは、「百害あって一利なし」である。後者の意義や有用性を理解できるようになるには、新しい学習観と授業観をもたなければならない。こうした意味で、教員だけでなく学生にもそれらを学ばせ、理解できるようにしていくことが今後ますます重要となるだろう。

第5回の最後に「先生は5回の授業を通して話し合うことの大切さを訴えようとしていたんですね」と私に言いに来た受講者がいた。その受講者はそれまで何度も私に疑問や不満をぶつけていた。受講者との相互作用を大切にすれば、たとえどんなに辛くても葛藤を避けてはならない。受講者と真剣に向かい合い、ぶつかりあう授業ではスムーズに予定通り進める一方通行の授業の心地よさは得られないかもしれない。しかし、だからこそ得られるものがあることを忘れてはなるまい。

注

- 1) 正確には「保健婦・士、助産婦又は看護婦・士として5年以上看護業務に従事した者であって、本講習会終了後看護教育に従事する者」であるが、以下、「看護婦」と表記する。
- 2) 筆者が携わってきた看護リーダー研修については「リーダーシップ&コミュニケーション対処術」（看護対人行動学研究会 2000）を参照していただきたい。
- 3) 最初の3年間は「心理学」（2単位）、その後現在までの5年間は「行動科学」（4単位）を担当してきた。この授業実践に関しては米谷（1996）を参照していただきたい。
- 4) 筆者が大学で行っている通常の授業と同様、授業終了時に、受講生は授業の感想・コメントや質問等を書き、氏名を明記して提出した。それぞれの感想文は次の週に学生に返却した。なお、できるだけすべての感想文に短いコメントを書いて返却するよう努めた。
- 5) こうした授業感想のフィードバックや、それを授業の教材に用いる方法は、京都大学高等教育教授システム開発センターで田中毎実教授を中心に継続してきた公開実験授業（京都大学高等教育教授システム開発セン

ター 1998) をモデルにしている。

- 6) 「絵あわせ」は(財団法人) 集団力学研究所のPM式リーダーシップトレーニング(米谷 1994) で用いられるグループセッションであり、この技法を筆者はそこが主催したリーダー研修にオブザーバーや見習いトレーナーとして参加して習得し、その後、10年にわたる看護婦リーダー研修で用いている。
- 7) 筆者が看護婦リーダー研修によく用いている小集団用対人技能訓練技法であり、グループづくりにしばしば用いられる。小集団でメンバーが順番に自己紹介などの短いスピーチをした直後に全員の顔を見る。そのとき他のメンバーは拍手をしながら、見つめられたときに軽く微笑み返しをするというもの。詳しくは米谷・鎌田(2000)を参照されたい。
- 8) 平成12年度愛知県看護教育研究会夏期研修(平成12年8月23日 愛知県中小企業センター)で約400名の現職の看護教員を対象に、「授業評価と教師の成長」というテーマで約4時間講演した。

文献

- 看護対人行動学研究会(編), 「リーダーシップ&コミュニケーション対処術」, 日総研出版, 2000
- 京都大学高等教育教授システム開発センター, 『開かれた大学授業をめざして - 京都大学公開実験授業の1年間 -』, 玉川大学出版部, 1997
- 米谷淳, 「リーダーシップ訓練に関する実践的研究Ⅱ」, 奈良大学総合研究所所報, 第2号, pp. 83-95, 1994
- 米谷淳, 「看護学生のための『行動科学』の授業設計」, 『看護教育』編集室編『看護教育新カリキュラム展開ガイドブック 基礎分野/専門基礎分野 カリキュラム案とその展開』(医学書院), pp. 92-95, 1996
- 米谷淳・鎌田美智子(編著), 『看護場面におけるコミュニケーションガイド』, 日総研出版, 2000

補遺

補遺1 平成13年度大阪府看護教員養成講習会(概要)

目的 看護教員の養成に携わる者に対して、必要な知識、技術を修得させ、もって看護教育の内容の充実・向上を図ることを目的とする。

期間 平成10年4月10日～12月21日

対象 保健婦・士、助産婦又は看護婦・士として5年以上看護業務に従事した者であって、本講習会終了後看護教育に従事する者... (年齢40歳以下、推薦を受けた施設に1年以上勤務している者...) 70名(大阪府だけでなく、奈良県、京都府、兵庫県、滋賀県の看護学校や病院に勤務している者が受講した)

内容 看護教育に関する事項を基礎分野(心理学、情報処理演習など)4科目、教育分野(教育原理、教育心理学など)5科目、専門基礎分野(看護論、看護論演習など)17科目の計26科目、915時間。座学形式の講義だけでなく、現場での実習やパソコン等を用いた演習を含む。毎日、午前3時間(9時30分～12時30分)、午後3時間(1時30分～4時30分)を150日以上にわたって受講することにより厚生労働省認定の修了証書が交付される。11日以上欠席した場合は交付されない。

補遺2 「討議方法」の授業案

ねらい

学生の参加意識を高め、より主体的で深い学びと気づきを獲得させるためには小集団に分かれてのグループセッションは有効な授業方法のひとつです。この講義では、バスセッション、ディベートなどのさまざまなグルー

ブワークの方法を実習を盛り込みながら、受講者に体験的・主体的に学んでいただくことがねらいです。今年度は、とくに、新人看護婦や看護学生の事例をもとにグループセッションを通して看護学生に看護コミュニケーションを学ばせる授業を設計し、各自のクラスで実際にやってみることができるようになることを目標として、授業を行います。

授業計画

日時 木曜日 午後1時30分～4時30分

第1回 6月21日 小集団のグループダイナミックス

いくつかの典型的なグループワークを紹介する。ペアになったの自己開示(Who are you?)、マイクロラボ(自己評価と他者評価)、絵あわせ、バズセッション、ディベート(フィッシュボール)などを体験する。

第2回 6月28日 グループワークを用いた授業を体験する

「小集団による事例検討」を利用した看護コミュニケーションの授業をデモンストレーションし、そのねらいと意義、効果と注意事項について検討する。

第3回 7月 5日 グループワークを用いた授業を設計する(1)

第2回の演習を続け、授業の中での集団討議の方法に習熟させる。さらに、自分で集団討議を用いた授業を設計するための心得について説明する。

第4回 7月12日 グループワークを用いた授業を設計する(2)

集団討議を用いた授業を設計し、シミュレーションする。

第5回 7月19日 グループワークを用いた授業を試みる

互いに集団討議を用いた模擬授業をやりあい、相互に評価し、問題点や意義について話し合う。まとめのレポートを書く。

教科書

米谷 淳・鎌田美智子(編著)『看護場面におけるコミュニケーションガイド』日総研

看護対人行動学研究会(編)『リーダーシップ&コミュニケーション対処術』日総研

参考書

大塚 ほか『グループワーク論』ミネルヴァ書房

フィリップス 著(花村 訳)『グループワーク実践の基礎』相川書房

藤岡 ほか『実践グループワーク』ミネルヴァ書房

福田 ほか『グループワーク教室』有斐閣選書

坂野『リーダーのGWT』遊技社

武田・大利『新しいグループワーク』YMCA出版

トレッカー 著(永井 訳)『ソーシャル・グループ・ワーカー原理と実際-』日本YMCA同盟出版部

受講生へのメッセージ

授業は班単位で行います。体験型、参加型の授業を体験を通して学んでいただくとともに、自分自身の授業でそれができるようになっていただきたいと思います。みなさんで楽しみながら、充実した授業にしていきたいのでよろしくお願いいたします。

補遺3 受講生の反応（一部）大阪府看護教員養成講習会「討議方法」第1回（6.21）の感想文から
気づき

・講義が始まった時には、やはり初対面ということで「この先生はどんな方なのだろうか」「何を学ばせてもらえるのだろうか」とさぐりながら聞き始めた。

クラスのテンションと先生のテンションが初めは少しズレている様に思えたが、どんどん先生のペースにはまっていた。

・相手の顔をじっと見るということは普段しているようで、案外していなかったかもしれない。

・グループセッションで自分の評価を確認するのはとても照れました。しかし、又、違った自分を発見する機会にもなりました。／GS、GWともにどちらかという嫌いですが、今回の授業で「ポジティブ」にやってみようという気になれたようです。（嫌いだった理由はハズカシイから。）／「自己評価・他者評価」はとても照れくさいですが、みんなの雰囲気がよくなったと感じました。（3）

・授業を受けると知識だけでなく、その講師が学生をどう受けとめ、又は、学生をどうとらえ、授業をされているか、その講師の人間性も授業に反映してくる（学生に伝わってくる）ものだとつくづく実感しました。

・私は専任教員であるが、今までの自分の授業を振り返ると学生に教え込む授業であった。そうであるのに、学生に対し、授業中居眠りをするとか、教えたことを覚えていないとか、主体的ではないと、学生側に責任があるように思っていたが、実は大きな間違いであったことを今日改めて実感した。

・私の受けた看護教育では「教育すること」「学び続けること」などがどういうものか教育されてきていません。

学び

・「かおをみよ」は楽しかった。終わった後のグループに生まれた雰囲気が何とも言えないような雰囲気になった。これはとても大切だと思った。／GSをすれば雰囲気が良くなるのは実際に体験できて、よくわかりました。一方的な講義であれば興味を持ち、考えることは難しいと思いました。／GSでは雰囲気づくりが大事というのがよくわかった。／「かおをみよ」でメンバー間の顔がほころんだのを見て「いい感じ」と確かに思いました。／集団の力をよい方向にもっていくようにすることが大切であるということがわかりました。／笑いのでないレクチャーはだめなんですね。／反応をみてその場で判断して切り換えていくのはとても難しい。／相手を誉めることも良い雰囲気づくりの要素となるので大切。／私も同感（21）

・GSや、GWとGSが違うことがわかった。（4）

・今後に生かせそう。／今日の講義で学んだことを後々生かしたいと思います。／授業で体験したことをきちんとまとめておきたい（3）

・「評価は強化」という言葉も印象的だった。（2）

・FDのお話は他の講義でも聞いたが、さらに詳しく聞け、とても勉強になった。

・「表情は作らせるもの、笑顔は作れるもの、気持ちはあとからついてくる」

・この講習に参加し、自己の学習をもっと高めるような気になってきていますし、今日の授業でもこのことを確認しました。学生にも自ら学ぶことを伝えたいと思います。

授業の進め方

- ・元気なテンポのよい、おもしろい授業だった。／講師の個性・人間性がよく表れていて楽しかった。(6)
- ・雰囲気づくりは大切／GSの持ち方、学生へのかかわり方が先生の「笑顔」からよく読みとれました。／雰囲気づくりに気を配っているのがよくわかりました。／なごめました／雰囲気づくりはよくわかったが、ときどき「操作しよう」という気分も伝わって憂鬱にもなった。(5)
- ・2時30分頃から時間が少し長く感じた。／前半は「この授業、どーなってしまうのだろう」と思った。／後半のグループワークは楽しかったですが、前半の話は少し長かったです。／グループセッションに入るまでの時間が長い。／最初のレクチャーで少し眠たくなった(5)
- ・楽しい授業を期待します。／今後もメリハリのある中に最新の授業方法について学びを深められることを期待しています(4)
- ・すごく一生懸命講義をされている意気込みが伝わってきました。／熱い授業内容(2)
- ・3時間があつと言う間にすぎた。
- ・パワーポイントにより講義内容がききやすかった。
- ・講義が予定通り進まなくても私的にはOKです。

授業内容・説明の仕方など

(評価・支持・励まし)

- ポイントを繰り返し言っていたので「ここは大事」とメモすることができた。／大きな声で大切なところを何度も言ってくれたのでわかりやすかった。(2)
- グループセッションが今、なぜ必要か理解できた。
- GSが必要とされる背景もとても実感できた。
- 「話しをもどすと」「ちょっとここ聞いて」など、話しをもどして下さる時、きちんとと言って下さるのでわかりやすいです。

(注意・苦情・改善点)

- ×GSで書いているとき、先生が話していると気が散って書けません。考慮して。／考える時は時間をもう少し下さい(3)
- ×大切なポイントを繰り返すのはくどい／同じことをくり返すので整理して(2)
- ×「～、わかる？」はやめて。先生は語尾に「わかる？」をつける癖があるようです。なにか「わからないだろう」と言っているように聞こえ、印象が悪くなる。(2)
- ×早口で、話しがあちらこちらにとぶのでついていけない。
- ×話し方の口調が特有で聞きづらい

An Action Study on Improvement of University Teaching: 6. Teaching "Discussion Method" in Training Course for Nurse College Teachers

MAIYA, Kiyoshi(Associate Professor, R.I.H.E., Kobe University)

The present paper reported my course, "Discussion Method", in training course (freshmen seminar) for nurse college teachers which was produced and conducted by Osaka Prefecture in 2001. Seventy fresh teachers participated in the training course. I taught them the meaning and the procedure of several group session techniques, e.g., group discussion, "jigsaw group", buzz session, case study in group, e.t.c., in my course (5 days x 3 hours).

In the first class, I explained the aim and the program of my course, and trained how to introduce group session in the beginning of a group work. I often use a group technique which was named "looking face of each other (Kao-o-miyo)" where each member looks at other group members one by one with smile. I taught the participants how to use the "looking face of each other" technique and another group session, "evaluating each other and comparing the others' evaluation with the self evaluation for self image." In the second class, I lectured the change in university education and the faculty development program for university teachers. I accented that Japanese university education is changing from teaching-oriented to learning-oriented. After the lecture, I taught them three group session techniques, "Who are you? / Who was he or she? (introducing each other in pairs and explaining the previous interviewee to another person)", buzz session (group discussion without leader), and "jigsaw group" (each member sees each part of a picture and learns it by heart, before drawing without the picture and making a picture together in each group). In the third class, they tried the second session of "jigsaw group" after they were explained the aim and the key points of the session. And, they learned another group session, "case study in group". In the fourth class, they watched a video of a debate session and listened to my lecture on the course designing and syllabus writing. In the fifth class, they listened to my lecture on the merits and the demerits of group session techniques and new theory of teaching and learning from the standpoint of social collectivism, and enjoyed debate session in each group.

During my course, I read the participants' reports in each class and modified the course program and the teaching materials several times. Although my course, "Discussion Method", was under development, I think my challenge in creating a new course was meaningful for my faculty development.